

## 編集後記

『語研紀要』第46巻第1号をお届け致します。本誌には論文5篇、研究ノート1編の玉稿をお寄せいただきました。ご寄稿頂いた先生方に厚くお礼申し上げます。

昨年度の編集後記に「更に来年度からは、日進キャンパスに加えて、名城公園キャンパスや楠元キャンパスに出向いて授業を担当される先生方が多数おられます。研究時間の確保という点で工夫を要するかもしれませんが、そのような中でも、今後もますますの投稿を切にお願いする次第です。」と書いていますが、それは、研究時間の確保という点で、大変な年になるだろうと予測してのことでした。

しかし、今年度はそのような状況を吹き飛ばすような事態が招来されました。言うまでもなく、新型コロナウイルスの感染拡大です。春学期は、すべての授業が遠隔授業となりました。授業の準備に追われることになったのは私一人だけではありませんでした。ほとんどの先生方がそうだったでしょう。そして、秋学期が始まるや、『語研紀要』第46巻第1号に投稿論文が果たして集まるだろうかという不安の毎日でした。原稿提出締切日を控えたその週の火曜日の時点で、提出原稿なし、の状態でした。この事態を受けて、締め切りを延期するかどうかを諮るため、急遽、ウェブ上で、語研の運営委員会を開催しました。延期しても原稿は増えないだろうというのが大勢でした。それで、締切日をそのまま迎えることになったのです。結果、最初に述べたように貴重な投稿論文が集まりました。感謝以外のなにものでもありません。本当にありがとうございました。

コロナ禍で、例年春学期に開催される講演会が11月27日に延期になり、名古屋大学大学院人文学研究科の准教授北村陽子先生に、「軍隊と動物—世界大戦期ドイツにおける盲導犬の発展—」という演題で講演をしていただきました。また10月23日には、Teams を使ったのオンライン授業と WebCampus を使用してのオンデマンド型授業について、研究発表会が開催されました。日々 Teams 等で格闘をしている私たちにとって刺激と示唆に富んだ内容でした。

私たち大学に勤める者にとって、教育と研究は両輪だといってよいでしょう。今年度はその両輪を動かすことが本当に大変な年でした。この経験を踏まえ、来年度には研究にも成果を残したいものです。

(吉井浩司郎 記)